

実際、北海道の富良野の畑作地帯では、文化庁により景観上重要な地域に選定されたということに対して、地元が歓迎と戸惑いを持っています。

観光振興につながるのではないかと歓迎する一方で、色々な規制が入ってしまい、農業が自由に営めなくなるのではないかとこのことを懸念している訳です。

更に、残すということになった時に、そのためのお金を誰が負担するのか、それだけの価値が本当にあるのかということも問われてくるでしょう。

このように、残すという立場も、棚田のような文化的価値が高いところはいいかもしれませんが、一般の農村景観に対して、残すということを考えていくことは、難しい問題があると思います。

こうなると結局、第三の立場である「生かす」を考えていかざるを得ないのではないのでしょうか。

残すのか、作るのか、生かすのかといえば、生かすということを考えていくべきだと、私は思います。例えば、イタリアのトスカーナです。

イタリアの半島の中心に位置し、世界遺産にも登録された、大変、美しい農村景観が広がる地域です。トスカーナではこれまで、農村景観の保全やアグロツーリズム（グリーンツーリズム）に関する取り組みが、ずつと行われてきました。

数年前、私はトスカーナの農家民宿を何軒か泊まり歩いたことがあります。中でも印象的だったのが山奥の、わずか数軒の世帯しかない集落にあった宿です。

この宿は、納屋を改装しただけの簡素なつくりでした。

日本の普通の民宿を比べても、むしろ、こちらの方がよっぽど簡素でした。

日本人が初めて来たということで、非常に歓迎してくれました。

この宿を営んでいる農家は、肉牛の生産農家でした。この界限の牛は、肉質の良い肉牛として有名で、民宿の食卓にも、この牛のステーキが並びました。

また、おばあちゃんが地元の素材でパスタを打ってくれたり、様々な地の食材で作った皿が並びま



イタリア・トスカーナの農村景観



した。

トスカーナにおける農村景観の保全の特徴は、農業振興と一体化し、地産地消や地域資源の有効活用が図られているところにあります。

ただ、きれいな景観を作りましょう、残しましょうというのではなく、地域で産する食物・食材をそこで使う、食材だけではない地域にある様々な資源をうまく使っていくことと一体化して、景観の保全を考えているのです。

更に、余計なものを加えないということ、むしろ取り除いていくことを目指しているのも特徴の一つです。

放置され廃墟となっていた廃業したホテルを、村人が中心となって行政に働きかけ取り壊したり、大手のスーパーマーケットを目立たないところに配置したり、といった取組を行なってきました。

このように、全体の調和をいかに図っていくか、余計なものはいかに加えないか、その一方で、地域にある様々な資源、農業、農産物をうまく生かしながら暮らしを作っていく、そういうことと一体的に景観を考えていくことがトスカーナを作っているということを知りました。

では、日本でそういう例がないかというと、ない訳ではありません。

例えば、大分県の湯布院です。

湯布院は、九州の一大観光地で年間何百万人の観光客がやって来ます。

しかし、湯布院はかつて、隣の別府温泉に客を殆ど取られてしまつて、非常に寂れた温泉場だった時代がありました。

その時、ある温泉宿の主人が、このままだと湯布院が死んでしまうと立ち上がり、町おこしをしました。湯布院が目指したものは、別府になくて湯布院にしかないもので町おこしをしようということでした。

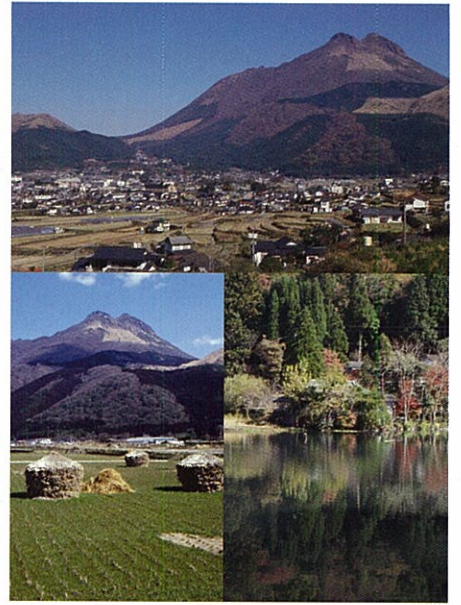
それは、農村の景色であり、この景色の中で採れる地の野菜や地鶏でした。

この景色を楽しんでもらいながら、地の野菜や地鶏をお客さんに提供しようとしたのです。

最初は、地の野菜や地鶏で誰が喜ぶんだと反対した人もいたそうですが、結果的に、この景色の中で採れる野菜や地鶏を中心に町づくりを行っていたことが、今の湯布院につながったと言われています。他には、福島の会津盆地の外れの方に山都という町があります。

更に、町の中心から、山の中に入っていくところに、宮古という集落があります。豪雪地帯で、かつて真冬の時期には、麓との往来が途絶えることもあったという山奥の集落です。

この集落は、そばで町おこしをしたことで有名です。



湯布院温泉(大分県由布市)



宮古集落(福島県喜多方市山都町)

しかし、そばで町おこしと言っても、この集落は、「そば体験館」、「そば交流館」、「そばレストラン」といった新しい施設は一切作りませんでした。では何をしたかという点、何件かの農家が、お客さんに母屋に上がってもらってそばを出しました。つまり各農家は、厨房と母屋の一部を改装するにだけしかしませんでした。開店している時期も春から秋までで、冬の間は村全体が閉店です。宿泊施設も一切ありませんので、ここに泊まることも出来ません。しかも、そばは決して安いものではありません。一番安いコースでも二千円ぐらい、高いものになると三〜四千円します。

それでも、わざわざ都会から車を四〜五時間走らせてそばを食べに来るお客さんがいるのです。私がお金を気に入っている理由は、地域資源として、元々この地にあったそばとおいしい水の二つだけを使い、後は余計なことを一切しなかったことにあります。

更に、後継者もいてもいなくてもいい、都会から来た人が、自分の作ったそばをおいしいと言っていて満足して帰ってくれるのだしたらそれでいいと言っています。

景観は掛け算

以上のように、景観を整えることは、決してきれいな景色を守るとか作るということではなく、例えば圃場をどのように整備するか、集落をどう整えていくか、道路をどう作っていくのかなど、空間にかかわる様々な要因の掛け算で決まるものだと思います。

掛け算ということは、一つでも0点の要因があると、掛け算の結果はゼロになってしまうということです。

足し算だったら、0点の要因があっても他がいい点であれば合計点はよくなりますが、景観は、掛け算で考えるべきものだと思います。

空間にかかわる様々な要因がうまくバランスされ、おしなべて良い点がついたとき、景観は良くなるのだと思います。

それは、身だしなみを整えることに近いのではないのでしょうか。

身だしなみを良くする上では、お化粧も大事です。しかし同時に、健康であって、マナーもしっかりしていて、服装もきちんとしているといった、色々な要素が全部備わって初めて、身だしなみがいいと言われるのではないのでしょうか。

どんなにきれいにお化粧し、高い服を着ていても、健康じゃなかったら身だしなみがいいとは言えません。

また、身だしなみは誰のために整えるのか。商売をしていて、接客のためというケースもある

かもしれません。

しかし、それが全てではありません。

お金儲けではなく、誰かが褒めてくれるからでもなく、自分が自分らしくいるとか、自分の気分を高めるとか、家族が気持ちいいからということが、動機の一つにあることも多いと思います。

景観についても、それと同じようなことが言えるのではないのでしょうか。

自分や家族のために身だしなみを整えている人は、端から見ても気持ちよいのと同じように、自分たちの暮らしを良くするために整えてきた景観が、結果として他の人にとっても気持ちのよいものだった。そういうものではないかと思えます。

景観を整えることは多くの場合、お金儲けや集客を目的にするのではなく、元々は自分が気持ちよく暮らしたいという動機が根底にあり、それに共感した人が、結果的に集まってくるというたぐいのものではないでしょうか。

河川の整備に際して、コンクリートで護岸を固めてしまう。これはよく景観破壊だと言われます。

しかし私は、果たしてそうだろうかと思えます。確かにやり過ぎたところはあります。

でも、整備をしたから、それまで洪水が頻発していたような川を治めることができ、人命が失われることもなくなり財産も守られたとなれば、これも立派な景観の一部ではないかと思えます。

本来は木でもないのに木のふりをした欄干を作ること、一体どちらを子どもや孫に伝えたいのでしょうか。

お父さん、お爺ちゃん、お爺ちゃん、お爺ちゃん、お父さんやお爺ちゃんの代に一生懸命命をかけてくれたから財産が残り、子孫である自分たちが今ここにいて言ってもらおうのか。私たちが本当に継承していくべき景観はどちらだろうと考えると、答えは明白ではないかと思えます。(終)